古き都云々—大阪の廿二社なり本文に番號を附したり　戀と云ふ其根源—神社の事より事を起して男女の戀も諸册の二神より起ると也　曲輪樣—兵庫播磨酒云々—縫物の小袖は今流行ちぬとて白人の姿をする　風呂の煙云々—風呂屋の湯女の風にも似せる　ふるかく—古格　水離せぬ—縁の縁にて親の側を離れぬ様　苗代水云々—天

興兵衛おかめ　ひぢりめん卯月の紅葉

近松門左衛門作

廿二社巡り

古き都や浪速潟々々々、廿二社詣で急がん。戀といふ其根源を尋ぬれば、神と神とが肌觸て、抱寄せ給ひし腹帶の、解てほどけて世に溢れ、產弘めにし人種の、次第々々に孫嗣て、色の道には發明な、町の小娘若嫁の、眞似る芝居の女形、髪の結ぶり小利口に、ひつくる〳〵〳〵曲輪樣、今は向ぬと縫箔の、夫にはあらぬ白のふう、風呂の煙りのたち居迄、姿似せれば心も俱に、染る紫縮緬の、小皺のよりし姥嗅迄、情こめたる此時代、年經て爰に石上、古道具屋のふるかくな、堅ぢの父の親の手を、水離れせぬお龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし。正五九月の神參り、殊に此ごろ我親と初元結の我夫、聟と舅の挨拶の、中に節たつ早苗月、皐月の雨は神心、夫の身の上安穩に、田畠を濕す其如く、苗代水に堰かけて、惠めや　あまの川崎の、大權現を伏拜む。此御

の川苗代水にせき下せ天下りますす神ならば神（能因法師）

絲屋の小絲—本町二丁目の絲屋の娘姉は十六妹は十四云々の作詞

廿五—天滿の緣日

こりや堀川—コリヤホリヤとかく

此神明—西天滿にあり

己は夫を—お鶴は情死をしんしよ—身代樣々—座驚の社にかく

手鞠の門—手鞠の歌よむ唄松の落葉三卷にあり

神の君が代を聞も語るも有難き、蝦夷か千島や朝鮮國、琉球筵敷島の、此日の本の外迄も、御威光四方に飛梅の、(一)天滿の社に手習子共、書て上たる龍虎梅竹。糸屋の小糸、然は十三妹は十二、殿御欲さに宿願かけてゐ、月の參りは廿五日、やつさ、ありやそりや、こりや堀川の恵比壽殿。(四)北野は天滿と御一躰、荒人神と音高く、とどろ〳〵と鳴神もよもや破らじ、よもや裂じの幼な馴染の女夫合、(五)此神明に祈らばや。扨六番は曾根崎の、宮の木立といつごろよりか、なたてがましき天滿屋お初、他所に聞さへ身に蜆川、水の流れの勤めの憂身、どうで女房にやもたれぬ中の、死ぬる生るは愚の沙汰よ。己は夫れをと願ふじやないが、男故なら命もしんしよも取てゆけ。どこらへの、こゝらでの、お手を引あふて二人のかばね、爰に梅田のナ橋に寢てサ、夢を津村の新御りやう、人の祈りは樣々の、大明神や其次は、(九)仁德帝の宮所、拜み巡りて十番に、數も願ひもみつ寺の正八幡に早つきぬ。(十)道頓堀の糸竹や、太鼓の聲にひかされて、心も足もしやならしやなら、ちよつと立見の手鞠の曲は、歌ひいふうみい、よういつむなゝ八よゝろ〳〵、とんとはづむも可愛らし。明日も來うぞの歌恵比壽橋や。恵比壽橋越へて、見たや見せたや難波ア橋。(十一)難波の今宮是からは、野道の風の冷しさに、笠も帽子もはれ〳〵と、兩の袂に

とりなり―姿勢

南東云々―南の牛頭は十四番にて東のは十五番なり

神は見通し―神は言はずとも人の誠を見通す

登ればさつさ―若緑卷四心すゞしの唄をとれり

唐土人―王仁

中よい月―月は少女にても穢を仄めかす之は若緑卷四照る月の唄をとりたり

身になし―親身の友にする

吹きたまる、歌身も冷々と心よき肌を締させ、しめて囉はど此方からも、じつとしめ〳〵、空も濕りて五月雨の、雲のすゞしの帷子の、衣紋繕ひとりなり直し、鬢撫ぶる差櫛の、蒔繪に似たる松原は、安井の天神是ぞとよ。天王寺には十五社の、鎮守を一社と伏拜み、扨十四番十五番、南東の門前の、牛頭天王に我願ひ、幾つとはなき生玉の、玉の光りの透通り、神は見通し云はず共、心の底の只ひとつ、夫を頼みに北向の、八幡宮の御盟ひ。世々に高津の坂道を、歌登ればさつさ、下ればさつさ、さつさ三六十八番、爰も難波の大君を、唐土人の褒め詞、咲や此花今はとて、梢も青き夏木立、西を遥かに百舟の、入江の秋の海面に、沖津白浪さばけて忍べ、碎けて遊べ中よい月に戯れ遊べゑい〳〵。遊べゑい〳〵、ゑい〳〵〳〵〳〵、照る〳〵月、月てる〳〵、君と寢たらば何とよござるまいかの、照る〳〵月、月や月讀の、旭の神明額きて、あをのく顔に當る日を、袖でかざしの玉造、稲荷の宮居こゝもまた、伊勢の内外の内平の町、太神宮よといろ〳〵の、諸願の種を上町の、座摩の御旅に廿二社、拜み納むる袖神樂、少女子ならぬ御子町に、問ふべき占のあればとてまだ日の足も南へと、駕の息杖息つがず、走らせてこそ三重急ぎけれ。幼き時より氣に入りて、幾春秋をふりと云ふ年季の下女を身になして、かくす事

黒格子―林町に住む巫子の名、色々あるを内黒格子名高し（皇都午睡）

口寄―死人の魂を呼びて語らしむる巫女

あいくろかうし―愛くるしにかく

口と口云々―口寄と接吻

梓弓―人を寄する時箱の上に珠數と弓を置きて夫を神に代つて鳴す

天清淨云々―祈の詞

一つ根節―お龜夫婦はいとこなる故

をも語りしは、黒格子の辻とかや。上手と聞し神子の門、龜「あゝ申、少口寄せを頼みませふ」とぞ案内ける。弟子の小女郎心得て、「お通りなされ」と戸を明れば、お龜は一間に入にけり。暫らく有て立出る、神子もよつぽど見へるもの。「アヽ、能ふお出なされました。大坂のお衆で御座りますか。お供の爰へ上つて、先あをいで上さつしやれ。お茶持おじやや」と待遇は、あいくろがうしの若神子の、口と口ともよせまほし。「して先御用の事有とは、生口か死口か」といへば、龜「いや然ればとよ、頼み度きとは生口なるが、海山隔てし方でもなし。只二三里の道を越へ、五日六日の便りもなし。どうがな斯がなくよ〳〵と、案じ詫たる御身の程、寄せてたべ」とぞ仰せける。神子は合掌目を塞ぎ、數珠をくりひく梓弓、神下しして寄せにける。「天清淨地清淨、内外清淨六根清淨、天の神地の神家の内には非の神、庭の神かまの神、神の數は八百萬、過去の佛未來の佛、彌陀藥師彌勒阿閦、觀音勢至普賢菩薩智惠文殊、三國傳來佛法流布聖德太子の御本地は、靈山淨土三界の教主世尊の御事なり」此御教への梓弓釋迦の子神子が弦音に、引かれ誘はれ寄來り、與「逢た見たさに寄り來たよ。なふなつかしの合の枕や」龜「我懐かしとは覺束なみの、寄來る人は誰ぞいの」與「誰とて二人思ふ身か　一ッね

ふしの双股竹、與兵衛を夫と思へばこそ問ふて給つて嬉しやの、問はれて今の恥かしや。扨世の中の憂節はなふ、わが善に人の惡きがあらばこそ、破れ車でわが惡い、とは云ひながら扇の影の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子じやないかいの。何しに粗略にする物ぞ。在所の生の親達より、猶孝行を盡せ共、丸い苧桶に角の蓋心が合ねば是非もなし。恨みも仇も外になし、憎いも辛いも只獨り。おもきが上の小夜衣よなふ」鶴「恨ありとは私が事か、お の樣の女房よ。仕方の惡い事あらば、なぜ殺しなりともなされずして、何か恨の有ぞとよ」與「ヲヽ二世と契りて最愛いもの、和女に恨の有べきか。小夜衣とは親ならぬ、親の手かけの茨草、目をつく樣に家の内を立ふと伏せふと儘にして、蔭言中言さよへ口、立てはふすべ居ては讖り、何がな見出そふ聞出そふ、日に角立る仁王貌。物には阿吽有故に、道具中間の商賣に、損もする又德も取、搖れば落る木の葉の露、我身にかゝる商賣の、夫におろかの有べきか。又しては〳〵、道樂者でのら者で、在所へ戻せ去せとて額に墨も入たもの、丁稚小者を云ふ如く、内の手代やにはだからの、侮づり者になし果て、あの女めが弟を、内へ入ふといふたくみ。町内からも小柴垣、ゆひ立れ共世の中の、藥の炙は身にあつく、毒な酒は甘ひとや、何をい

破れ車―人はわるない我身が惡い破車でわが惡い（諸國盆踊唄歌）
扇の影云々―諺、一方立てはは一方立ず
茨草―繼母もゐまをさす
阿吽―呼吸
額に墨―罷は角にはだから―下女下男の生みし子
女めが弟―傳三

郎　ゑぶ立—結ぶと いふにかく　牛は嘶き云々—反對の所爲　左褌—不運　ゆひ甲斐云々—結ぶと捲明かぬ身にかく

ちやかさる—胡魔化さる

ふても氣に入らず。牛は嘶き馬はほへ、理は非に落る左繩、ゆひ甲斐もない身なれ共、在所に歷きと親も有、敷金してあの下司めに、使はれふ筈はない。エ、口惜いはいの、腹が立はいの。舅の家を出るからは下司めたつた一打に、仕廻ふてのけふか、いや出所へ連出でて、首に繩を掛ふかと、樣々思案は仕たれ共、家の名を出す夫のみか、和女と緣が切ふかと、是が第一悲うて情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽拔鳥、立もたゝれず、居るも居られぬ家の内、和女に心引かされて、破れ暦にあらね共、あだな月日を數へたよなふ。粉糠三合有ならば、人聟すなといふ事は、我身の上の譬かや。十貫目と云ふ敷金を、あの女めにちやかさりよかと、涙が翻れて口惜いはいなふ」「おいとしやく、あのゐまめと云ふ奴を出入も止ふと思へ共、母樣の存生よりゐたる者の事なれば、なま若い私が身で、出過た事と控へしが、此秋は母樣の、十三年忌も仕廻まし、ふつゝと出入をやめさせん。して此間五七日は河内へ歸りて御入かや。そよとの便もない事は、扨は我にも秋風かや」與「ア、何しに和女に秋風の、立田の山の初紅葉、古鄕へは錦を著て歸ると申。今すごくと此姿何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺、天滿小橋に河口を、終日歩む時もあり、或ひは芝居で日を暮し、旅店に命を養ひて、暮れば和女が

懐かしく、人目忍びて門に立、軒の下成長持に、そつと隠れて折々は、若も二階の格子から顔も見へるか聲するかと、蓋を明方近づけば、立出歸り夜毎には、猶しも思ひ深草のしぢに通ひし車長持、巡り逢たや語りたや」語るに盡きぬ生口も今は是迄梓弓、龜「引ては歸る習ひなり共、暫しが程と、せめて留むる甲斐もがな」與「甲斐こそなけれ緣あらば」龜「あふも不思議」與「あはぬも不思議」二人「逢ずは何を玉の緒も絶へなば絶へね」と伏沈み、死したる人に逢ふ如く名殘を包む涙の袖、寄り來るよりの生口は、神上りして醒にけり。親の異見は直なれど、傍のとりなし横時雨、どこをしやうどにさして行笠屋與兵衛は在所へも、面目なしと戻り兼ね、心は有頂天王寺、御子町に迷ひ來りしが、お龜は神子に一禮して立出る門口に、下女が見付て「あれ與兵衛樣」龜「どれどこに」與「是はお龜か」龜「與兵衛樣かあんまり便宜もない故に、生口寄せに來ましたが、なぜに戻つて下されぬ。おりやどふならふと構はぬ氣か」と、縋り付てぞ泣居たる。與「ヲヽおれ迚も和女に心が引されて、在所へも歸らず、大坂中を立迷ふ雲介同前の身持となり、今日は河内へ行ふかと小堀口迄行たれば、親父とかまのゐまめとが　是も在所へ行風で、跡から來たをちらりと見て、やう〳〵逃て戻つたが、おれを見たか知らぬまで。怖い事

しぢ―樹、深草少將が小町の許へ通ひし故事

しやうど―目當、生處と書く（於屋筆記）

有頂天王寺―有頂天にかけてうはの空

かま―鎌、曲つた心をいふ

半四郎―名優岩井半四郎
半九郎云々―二人の心中狂言傳奇作書に出づ
四郎五郎―右の敵役

びらしやらし―ぶらぶら
はたへ―上さけ
會所―町の役場
年寄―町長

じや」と語りける。「はて見付られたら大事か。恨みも腹の立事も、私にめんじて下さんせ。昨日は私が氣晴しとて、父樣と、半四郎の心中狂言見たれ共、餘の事は耳へもいらず、半九郎お染が最期の臺詞、此方の胸に皆堪へ、二人死ぬなら死にたいが、こな樣死んで下さりよか、どうか斯かと思ふて居て、四郎五郎が不心中、面白いとて笑へ共、私や一日泣てゐた。泣てばつかり居たはいの」と、袂に取付聲をあげ、十五に成やならずにて、夫を思ふ眞實の、歎きの涙ぞ奇特なる。與「あれあれへ見ゆるは親仁じやないか。葛籠笠はゐまめじやは。逢ふてやかまし、こよ御免」と、神子の門にぞ隱れける。親長兵衞は手代を連れ、大汗流ひて來りしが、ゐま大聲上げて「ヤア是はお龜樣、廿二社廻りとてあぢな所へ來てござんす。如何に男を持たとて、若いなりしてびらしやらと、あんまりほたへさつしやるな」と、嚙付樣に夕立の、鳴る雷の如くなり。お龜ははつと怖ろしく、「今日の次手に母樣の、十三年忌の口寄せに、ちよつと寄たまでの事。して父樣はあの人連て何方へ」といひければ、答ヲヽされば與兵衞めが、在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に、入納めた讓り狀。身が使ひと詐つて、取て行んだと年寄から、斷りが云ふて來た。彼奴に讓る讓り狀、取て何に成事ぞ。家を棒に振りをるか、但はどふぞ公事

工か。日ごろは此所な女子と、いひごと小言が絶ね共、五分々々に聞て居た。彼奴が恐いに極まつた。河内の親に言渡し、直に埒を明んため、來ればあれで見付たが、此遊へは來せぬか」と、うそ〳〵見廻し神子の門、炙こりや爰にけつかる」と引出せば、與兵衛は、被き菅笠身に纏ひ、うろ〳〵出し其風情、お龜はわつと泣出す、笑止千萬哀れなり。妾笑つて「是與兵衛樣、此せいすいな私を、鵰の熊手の掴みづらのと異名をつけ、八丁まちへ名を立て、チヽ心の直な跡取樣、斯した事をなされても、是でも家が立ますか。コレ與兵衛樣やあ與兵衛殿樣」とど喚きける。與兵衛は指うつぶひてゐたりしが、顔を上げて「是女かしましひ。エヽ恨めしい親仁樣、あの家屋敷家財まで、私夫婦へ讓りの約束なれば、親子と存ずる故ふせうの事も堪忍し、心一ぱい働け共、何をするのもお氣に入らず、在所へ歸れ戻れとは、チヽ〳〵道理かな〳〵。家屋敷家財迄、ゐまが弟の傳三郎に、取らせると有讓狀、此與兵衛が聞てゐる。明日でも親仁樣、若しもの事も有た時、町衆が立合讓狀を披いて、傳三郎に跡式取られ、此與兵衛がすご〳〵と、生て在所へ歸られふか。是誰が業ぞ其女めとの談合ならん。此事を某には、誰が知せたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎、今迄おのれら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、

けつかる—居くさる
せいすい—生粋
鵰白な
鵰—鷲張
ふせう—不調
一本—一つ穴の狐

汝と思へども—恐い奴と思へども

行事—組合の幹事

三ツ鐵輪—一人を證に取て二人にて論じ定むる（俚言集覽）

いらん—遠慮か

天道が怖ろしさに、知らせまするとは告し故、後日の證據に取たるぞ。おのれはおのれと思へ共然り迚は親仁様、可愛ひ娘のをとこなり、甥子とは申さぬか。左様はなされぬ筈なり」と、聲を上げて泣きければ、お龜は傍にひつ添て、「母様生世の折ならば、あれらに口を利かせふか。母様は此世になし、伯母様といへば目は見へず、夫婦は誰を使りにせん」と、口説き歎くぞ哀れ成。長兵衛眉をひそめ、「是は夢々覺えなし。おのれを町へひろめして、直に出した讓狀、身が目を塞がぬ其内は、年寄行事も封を切らぬ書置を、傳三が知らふ筈がない。讓狀を奪ひ取て、親に難題いひ懸、あま兄弟に無實をいひ、大坂に置ぬ公事工み、おのれ獨りが智恵でない。サア讓狀が物をいふ。三ツ鐵輪で讀んで見よ」と、懷中へむさぼりつく。與「いやこれ親仁様、でんどでひらく讓狀、後の證據に封も解ず持たれば、こなたの手へ渡そうか。權柄になさるゝな」と、もぎ放せばこづかを取、引伏せ〳〵踏んづ叩いつ、散々に打擲し引起いて讓狀、奪ひ取たる有様は、目も當られぬ次第なり。「ヲヽ、成程身が判、封の儘只今披く是聞け」と封を解いてぞ讀みたりける。「北久太郎町心齋橋表口五間半、裏ゆき町並貳十間家財殘らず、娘お龜聟與兵衛夫婦に讓り申候。外よりいらん少しもなし如件」「これ見よ」と與兵衛が目に差付るを、

よく〳〵見れば紛ひもなき、我方への讓狀、與ハァヽ南無三寶、扨は傳三郎めが賢人面を見せかけて、我を取ておとさん爲、裏の裏を喰はせしを、知らではまりし悔しさよ。詐かられし口惜や」と、齒嚙をなして泣き居たり。長兵衛も怒りの涙、「こりや卑怯者、人な恨みそ皆おのれが誤りぞや。母なき娘が大事に思ふ聟が、何とて憎からん。皆根性のひがみから、親にも恨み出來るぞ。恨めしの心や」と、讓狀を與兵衛が面に、打付ど うど伏し、大聲上て泣きければ、妾はいきつて「咎もない傳三郎に、云被せしやるな」と哮りかゝつて怒りける。娘は我親我夫、中に立たる遣瀨なさ、傍で泣くやらわめくやら、往來も止まるばかりなり。神子町中がおり合せ、「人がたかる何事ぞ。早々通りや」と叱りける。「ァヽ御尤々々。御町の妨害御免あれ。サァ汝在所へ駕で送らせん」と、ひがやすな與兵衛を引立駕に押込めば、與「何の面目在所へはゆくまい」と、駕の左へつゝと抜けた。親も續いてつゝとぬけ、又引捕へて乘せれば拔る、親子くる〳〵出つ入つ、どこぞのはづみに長兵衛、駕をぬけるを町人ども「エヽ面倒な」と押込て、駕舁上れば長兵衛、「ャァこりや違ふた〳〵」と、わめけど更にきゝいれず、大坂の方へ舁て行く。お龜は歎き焦れしを、下女や手代が手を引て、なだめ歸れど立歸り、止まり見歸り呼懸

ひがやす―底抜
くる出つ―出たり這入つたり

て、息をはかりに泣かはす、山時鳥皐月雨、涙の雨もふる道具やの、聲ばかりして俤は、隱れがさやの憂き名殘、別れ別れに三重なりにけり。

古道具―降るに隱れ笠―笠屋にかく

花壇云々―花壇といへば名はよいけれど實際家の中心は淚にありとて、娘に生す芽をかくしは松の落葉櫻蕊しの下句を取りたり

鳥鵲や―逢ふ事至て稀なる事、牽牛織女會合の時鵲羽をのして渡す

中の卷

花聲と、名にこそたてれ下草や、娘ぞ家のしん齋橋、女夫の間は烏鵲や、笠やお龜は夕べより、寢られぬ目元落凹み、思ひ染みたる身の大事、中よき下女にも語らねば、たれも斯とは白無垢を、仕立る縫目大釘に、二度と著まいと思ふにも、涙先立つ折柄に、町内の娘友達二三人、「お龜樣内にかゐ。今日は五月の十七日、とふからの約束三十三番連立ませふ。サアこしらへさんせ、出さしやんせ」と、何の氣もなく誘ひける。觀音樣と聞くからに、未來の緣も嬉しけれど、甲「父樣も留守なり、これも仕立て仕廻たし。今日は連になりますまい。よふ拜んでや」といひければ、甲友―夏白無垢が入事か。詣らしやれ」と云ふもあり。乙「よしかをかしやんせ。ゐまのおじやつて見やつたら、留守明たとて喧ましからふ」丙「ほんにお龜樣も能い姑母を持んした。こちらばかり廻りませふ。與兵衛樣とこな樣と、一つ蓮と拜みませふ」と、云ふて出るも常なれど、思ひあればや身

にぞ染む。斯る所へ、與兵衛は今朝迄浮々さまよひありき、心も空に行ともなく、我家の門を徘徊す。お龜はちらと見るよりも、「是誰もない大事ない。これなふこれ」と呼はれば、笠をも取ずつゝと入り、二人ひつたり抱き付、臥し轉びてぞ泣ゐたる。やゝ有て與兵衛、「ムヽ此白無垢を仕立るは、死ぬる合點か嬉しや」といへば、「ヲヽさればとよ、これは斯はして置ども、是非に叶はぬ其時は、わたしが方から知せをせふ。必らず夫迄短氣な心持んすな。こな樣いかふ狼狽てじや。心を納めて下さんせ。ひよんな心を持まひぞや」と、力を付る其中にもさすがは年も童氣の、「いつそ連立走りたい」と、また紐り付抱き寄せ、引寄せ〳〵歎きける、有樣こそは不便なれ。下女のふりは差心得、門に立て西東、心を付てゐたりしが、「あれ鼬堀の伯母御樣、驚が見へる」と駈入れば、與兵衛は何とせん。伯母樣の目は見へねども、内の者が見付やせん」と、見世に立たる賣佛檀の、戸を明てこそは隱れけれ。程なく駕を舁入れて、伯母も下ればお龜は、「是はよふこそ」と、手をひき奥に入ければ、供の女は駕舁に、錢を「わたしも歸りませふ。晩方迎ひに參りませふ」と、云ふて其儘歸りけり。伯母は溜息ばつとつき、「爰のはまだ戻らずか。今朝こちへ來て、與兵衛が噺をめさつた故、あるにもあられず氣遣しく、扨こそ見

賣佛壇―道具屋なれば何でもあるも也
わたし―渡しと私
爰の―長兵衛

廻に來たるぞや。總じて入る入婿に小言の有はならひなれど、和女や與兵衛が親々は、伯母が爲には兄弟なり。和御りよ達は甥姪なり、どちらに贔負偏頗もない。まんろくを云ふ時は、皆與兵衛めが惡いぞや。胸前垂に草鞋かけ、親の辛苦ひとつにて、仕出たる此しんしやう、夫をまねぶが子の作法。何であらふぞ、唐物屋衆さへならぬ程に、ぞべぞへと著飾つて、謠講の俳諧の、若いそなたを女房にもつて、内の茶が呑み足らぬか、茶屋へもちよこ〳〵遣ふと聞。異見をすればいぶりを出し、商賣は袖にして、小路隱れの家出のと、聞度ごとに此伯母が、胸には釘を打如く、いふさへ泪がこぼるゝぞや。これなふお縷、年はいかねど男を持てば大人役。夫の身持惡ければ女房の名が出るぞや。戻つたりとも寄せ付ず、江戸長崎へも追下し、汐を蹈せて人にしや。とは云ひながら、與兵衛めは氣の弱ひ生れつき、無分別の出ぬ樣に、女夫あひをよふしやや。内に惡魔の有事も、憎い者は生けて見よ。是も世上のふせうぞかし。ァヽ淺ましや此伯母が、年はよる日は見へず、つれあひには放るゝ。子は養子なり嫁掛り、明日が日往生申ても骨を拾ふて眞實に、泣てくれるは與兵衛とそなた。子同前にいとほしく　よいが上にも能ふしたく、朝夕の看經にも、其方女夫を祈るぞや。お袋が此世にならば、是程苦勞は聞か

入る―入夫
まんろく―實際
唐物屋―舶來品を取扱せて暴利を貪り奢を極むいぶり―すねる事
袖―餘所
小路隱―茶屋小屋抓に入浸る事
汐ふます―離婚さす
憎い者は云々―憎いものがあつても我慢せよとの諺
ふせう―不幸
此世にならば―此世にあるならば

じもの。恨めしの娑婆世界、片時も早ふまいりたや」と、咽入り〳〵或は憐れみ或は叱り、蝋子を思ふ誠の泪、與兵衛もまろび出、ものはいはれず手を合せ、拜めばお龜は聲をあげ、「只伯母様を母様と、思ふて頼む」と計にて、縋りあひてぞ泣きゐたる、理りすぎてあわれなり。伯母は泪のひまよりも、懐より縮緬一卷取出し、「これ此緋縮緬は今は此手は渡らぬとて、此前人に囃ひしが、色變りしか知らねども、若い者は嗜みぞ。與兵衛と其方が肌の物に縫ふてしや。男も女子も旅他國、どこでどの様な事有ても、肌のものゝ善惡にて常迄思ひ知らるゝ」と、渡せばお龜「忝なし」と、夫諸共戴きて、跡まで清く顯はせし、心の色の緋縮緬む命ぞはかなさよ。時に亭主立歸り、見世の道具を見廻す間に、「あれ父様の」といひければ與兵衛裏へそろりとねけ、細目に明たる倉の戸を、明て内にそつと入り、くろゝをはたと落しける。長兵衛は不機嫌顔「ヤア伯母御出なされたか。手代共は一人もおらぬ、何處へうせた」といひければ、お龜聞も敢ず、「はて忘れさしやんしたか。一人は河内のおぢ様へ、一人は尼ヶ崎へ買物にやらしやんした」爻「ヲ、夫を何の忘れはせぬ。まだ歸らぬか野良共」と、表裏を見廻して「是はく、男ぎれは一人も居ず、倉に錠も下さぬか。扨々不沙汰千萬」と、つぶやき〳〵錠おろし、

此手—此種類

くろゝ—くるゝにて樞

伯母御出—伯母御御出か

男ぎれ—男のきれはしも

無沙汰—油斷

鍋巾著に打入れて、「伯母御遊んでお歸りなされ。我等は町の年寄へ、聟のすりめが談合に、參る」と云ふて出けるは、にが〳〵しくぞ見へにける。お龜は樣々心亂れ、「伯母樣少とお息み」と、奥の間にこそ入りにけれ。無慙やな與兵衛は、網代の魚の如くにて、倉の窓より顔出し、「水にても湯にても、切めて莨呑みたやな。烟管火繩は懷中す、お龜來らば火が欲しや」と、咽喉乾かし待けるが、「エヽ思ひ付たり」と、倉の案内覺えたり。水晶の根附尋ね出し、艾を少し押當て、入日の窓に差向へば、實に炎天の極陽の氣、水晶に火移りて、艾燻り出けるを火繩に移し、やす〳〵と莨に氣をぞ休めける。お龜は伯母を寢いらせて、庫をほと〳〵敲きける。與兵衛顔を差出し「是は何たる不仕合、云ふ事爲事間に違ひ、獨り網に羅りしは、如何なる因果」と泣口說。お龜は思案や仕たりけん、「斯なる上は一心を掘壁を破つて逃出、一人連にて在所へ行き、ゐま兄弟と公事をせん。此暮紛れに早ふ〳〵」といひければ、與「ヲヽ我も左樣思ふゆへ、壁はよつぽど崩せしが、壁下地の大竹を切る音の、響きては如何あらん」といふ所へ、與「あれ〳〵芝居の替りの太鼓、サア此間が能からふ」と、脇指拔て切破る、音も嵐の三右衛門、替り〳〵と打太鼓に、隱れて餘所には三重知れざりけり。ゐまが弟傳三郎斯くとも知らで來りしが、

嵐―名優の名あちこちにいひかく

「目那は留守か、お龜樣は奥にか」と、裏へ通つて後ろより遠慮もなくしつかと抱く。龜「エエ暑くろし誰じやいや。ムヽ傳三郎か。主といひ主ある身に、此樣な無作法は、覺悟なふてはならぬ筈、其根心が聞たい」と、騷がぬ顏で裏問へば、傳「ハテ根心とて別はなし、與兵衞のたはけめはどふでも此には置かれぬ談合。君さへ合點なさるれば、賤が聟になるじやゆな。但し阿呆がお好か」と、猶理不盡に抱き付。龜「ヲヽ聞へた扨はかの讓狀も、其方が欺して取らせたか」傳「如何にも〳〵町儀が何共濟ぬゆへ、手盛にさせて喰はせたる、才覺を御覽ぜ」と、いひも果ぬに、龜「ヲヽ、夫れを聞ふと云ふ事よ。あれ間男よ」と聲立る、口に袂を捻込で、絞殺さんとする所を、與兵衞壁より這出て、むんずと組んでひきければ、お龜は奥に逃げ入りける。與「おのれ不義者しんしやうの敵」と、摑みついて組合しが、傳三郎は剛力者、非力の與兵衞を取て投げ、足をもためず逃失しは、殘念なりける次第なり。「さわがしきは何事」と、亭主歸る折節に、手代も皆々立歸り、裏へ通れば與兵衞は、南無三寶と起上り、狼狽廻つて切明し、倉の壁ゑ這入る所を、長兵衞飛懸り、兩足摑んで引ずり出し、長「ヤレ與兵衞めこそ倉のやじりを切たれ」と、呼はる聲に驚き、伯母はお龜に手を引かれ、「そも實事か」とばかりにて、惘れ果てぞゐたり

裏問ふ—心中を聞く

手盛に云々—一奴食はせた巧みを見上となり

しんしやう—身代

ためず—留めず

矢尻—屋後、是を切るは強盜の所作

聲山立―大聲あげて
下で―内々
おきめ―刑罰
部―店の揚げ四

ける。「道具はあるか吟味せよ」と、鑓投出すを手代ども、戸を明け内に走り入り、「何も道具は違ひなく、是ぞ不思議」とふすぼつたる、火縄艾を取出すは、詮方なふぞ見へにける。親ははら〳〵泪をこぼし、「如何なる天魔が入替つたか。町衆をかたつて讓狀を取出し、大恥辱かいたる昨日の今日、親の倉のやじりをきり、此火縄の火は何にする。ヤレ罰當りめ、八百屋お七を見をらぬか。聲山立て町へ聞へ、下で濟ぬ詮義になれば、如何なるおきめにあふとか思ふ。そこを切ても不便さに、高い聲もゑ爲ぬはい。是でも己が心には伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじ、碌な死をせまいかと、却つて是が不便なり」と、涙を流し目をふるはし、色を違へて怒りける。お龜涙を押へ、「これ與兵衛樣うろたへまひ。云譯をなされ」といへば、與「イヤ證據もない云譯、見苦しげに何かせん。皆我々が不運なり。如何樣になるとても、親をも人をも恨みとは、思ふまいぞ思やるな」と、一聲いふたばかりにて、誰がもの云ふても返事もせず、歎き沈みし有樣は、目も當られぬ風情なり。長「日の内は外聞悪し。表を閉めて追出せ」と、部下して情なく引出せば、伯母お龜、「なふ今暫し」と取つくを拏放し拏放し、門より外へ押出し、くどり戸をはたとさしければ、内には妻の叫ぶ聲、外に夫の忍び泣、涙に曇る十七夜、

月に別れて三重出にけり。宵より二階に引籠り、待てど暮せど其人の、そよとばかりの音便も、早九ツの鐘の聲、書置涙に文字消て、先へ死んだもましならめ。しほれ詫たる折節に網に人の足音す。そつと二階の障子をあけ、覗けば夫も搔暮て、互ひに聲も立ばこそ、頷き合たるばかりにて、泣くづをれしぞ哀なる。用意し置しさしがへに、夫の白き帷子緋縮緬に結びさけ、下せば下より受取りて、死ぬる覺悟と心得ける。南無三寶西町より新町戻りの駕に提灯、走つて近く車長持、蓋をあけてぞ隱れいる。稍遣り過し出ければ、いつかは釘を放しけん、むしこをはづし帶結下、傳ふて下ん其用意、夫は長持ひき出し、心を碎く二階には消るばかりに蜘蛛の、糸に懸れる身の命、露の便りの危うさよ。憂さよ怖さよわな〳〵と、三重慄ひ傳ふを抱おろし、二人が顏を見合せて息つぎ胸を鎭めしが、「此比とだへし添寢の床、懷しなつかし戀しや」と、互にひしと抱きしめ、齒を喰しばり息をつめ、顏と顏とを打合せ身を悶へてぞ歎きける。町の夜番が時申、又長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる。夜番は物に心をつけ、けはしく門を叩き立、「これ起た〳〵、二階のむしこをはづひて、上から帶がさげてある。長持も出してある。盜人そうな」とわめくにぞ、家内一度に目を覺し、二階へ上れば娘はなし。「お龜樣が見

さしがへ云々―刀と白無垢を緋縮緬にて結び下ぐ

けはしく―烈しく

はづひて―はづして

へぬは。そりや提灯よ釣鐘よ、八ッ過じや八軒屋、河内よ堺よ川口よ」と、足元へは氣も付かず手分をしてぞ追かけける。夫婦は隙間に長持より、そつと出て邊りを見、先立失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へと志し、二三町こそ三重走りけれ。

先立失せし云々―去年梅田にて縊死せし猶市お高の事を云ふ（鶴色餘談）

今捨る云々―自然俳句になりたり、死ぬる身に盈る、浮なけれど犬の壁には流石に怖れる十五年―お盈の年なり　おの樣―與兵衛をさす　いはせ云々―いはせたいに屋を かく屋町―葡萄にかく、以下皆掛詞　安土―土　備後―便宜　瓦町―紫河原

末期の道行

江戸節　今捨る身にも恐ろし犬の聲、辻を隔てよ見かへれば、あれで生れし町所、家の馴染も十五年、其春夏の此月は、忌ひ月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死恥も包まし く、其方の髪亂れずや。いや我よりもおの樣の、鬢撫附てかきなでよ、死んだ跡迄よい殿と、人にいはせまほし明り、今宵の月を月々に、待しも遂に引かへて、冥土の使ひ我々を、待らん物とかきくれて、泪曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮る共、たとへ佛に成とても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、うまれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀨戸の淡路町、越れば親の古里の、名にも別るよ平野町、曙近き時太鼓、どう〳〵修町

淡路―泊戸　道修―撃々

伏見―師　恨々掘云々―蓮ず女死すれば手の爪を剝て竹の根々掘ちせちるとゝふ　立君―辻君　こぬ人―定家卿の歌　堤をそめし―堤を染めし血の縁に紅蕉笠と結けたり二人の心中を謂聲にて田舎迄唄ひ流さんと豫想す

合法鳥―鴎鳩と稱ふるものにて和名山鳩（比古婆衣）

これやこの、修羅の太鼓の響きかと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣くばかり。聞けば私しも甚様の三十過ての初子とや。其譲りかや馴そめて一夜離れた事もなく、交す枕に子胤のないか。是も産まずの數ならば、根を堀る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄ふてかへる其歌の、品有なかにも來ぬ人を、まつほの浦の夕なぎに、やくや藻汐の身を焦す。夫は吾妻の物語、耳に聞きたる計ぞや。和女と我は難波津の、貴賤群集の見るめかる、尼が崎町過書町にはや北濱や中の島、明日は歌天滿の橋々賣りて、梅田の、梅田の堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男廿一お龜は十五、年にあはすりや、いたづらくじや。サア繪双紙ゐ、餘所の口の端ア餘所ごとに、買求めては慰みし、此身の果を讃賣に、誰が節付て田舎迄、唄ひ流さん蜆川、水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草、ゆんでは無常の燒草と、惜からぬ身はおしからず。亀「灰となさふか此肌」與「煙と成か此形ち」亀「惜しや」與「いとしや」二人「悲しや」と、引合し手を猶締めて、涙の限り泣つくす、杜の小鳥川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付ば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかゝらん行先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は詮力夏草の、人

聲さび―聲嗄れる
夏草―無に堤―包むにいひかく

目堤の下かげを、爰ぞ夫婦が最期場と、泣々息らひ立にけり。お龜は夫の顏を見て「連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れとて　云たい事の何やらが、胸には有て口へ出ず、飽程顏が見て死にたや。心なの短か夜」と身を投かけて泣ゐたり。與「ア、愚かや愚痴や淺ましや。永き來世が有ぞかし。去ながら心に懸るは其方の父御、二人共無き獨り子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、與「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有べきが、愛しや在所のお袋樣、姑なりとて一日の、給仕へした事もなく、大事の子をば嫁ゆへに、失なふた殺したとお叱りなされんこれ一つ、目の不自由な伯母樣の、力と成はこちら女夫、さぞ今比は泣き悲しみ、眼でも眩ぬかどうしたと、胸に塞がる是二つ、又母樣の十三年觀音經を書ませふ、佛になつて下さんせと、墓に向ふて約束の、是が違ふた何やかや、かく迄重き罪科の、閻魔の前には黑鐵の、帳に付と聞ものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も獄はね共、夫婦別れて行ふかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲もおしまず歎きける。與「が男は力をつけ、「ひとつに行ふと別れふと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄火炎の地獄、劍の山へ登る共、取交したる手は放さじ」と、心强くは云ひけれど、まだ莟む花

觀音經―法華經、普門品
莟む花―花月は美人の形容

分て分たぬ涙―身は二つに分れても涙は一つ

樋の口云々―水門の戸を閉めて

出る月、玉の樣なる若い者、若い女の頑是なさ、なだめらるゝもなだむるも、分て分たぬ涙なり。與「あれ早東も白ふだり。サア念佛」といひければ、龜「心得たりと懷より、髮剃二挺取出し、これも母樣の額たれとて讓り也。私はこれで死たい」と泣く〳〵出す其なかに、向ふの野道を人通ふ。「あれよ〳〵」と心は急く、二挺の髮剃一つにとり「南無阿彌陀佛」と引寄すれば、お龜は常々信仰の「南無觀世音菩薩樣、母樣の戒名きやうよじゆりん信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音樣觀音樣」と手を合せて待ければ、男は目眩れ差うつぶき、只泣くより外の事ぞなき。玄「エヽ憂目を見せて何事」と、夫の手を取我が咽喉に、押當れば思ひきり、男「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髮剃の刃も折れよと一刎は刎りしが、若き者の悲しさは、とゞめの炎所を知らずして、未だ息絶へず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱への帶をくる〳〵と、二三遍引廻す、憂目の程ぞ不便なる我もやがて追付んと、咽喉にあつる髮剃の、刃は鋸と折碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれ共、とほりつべうはなかりけり。「南無三寶」と髮剃すて、傍にぬきをく脇指の、鞘をもつて引あぐる、鍔は重し手は弱る、はづんではぬる勢ひに、脇指ぬけて樋の口の、非出の水草の漲つて、ざんぶとこそは沈んだれ。男「エヽしなしたりこは

水を溜る所を井手といふ刀の中身がその中へはね返りて落入りたる也
しなしたり―しくじりたり

甲斐―貝
白波―知らずをかく

如何に」と、這ひ下る堤の露、飜れし血に足辷り、池へどうど落たりけり。池は深くて泥深く、底の脇指尋ねかね、浮ぬ沈みぬ漂ひしが、今を最後の眼にも、夫を思ふお龜が心、引揚んとや思ひけん、はふ〳〵岸によると見へしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落、互ひに助け引揚んと、抱き上ればどうど伏し、かき上ればかつぱと伏し、心ばかりを力にて、幸なふ與兵衛樣〳〵」男「お龜〳〵」と呼交す、絶へ〴〵切るゝ息の下、此世からなる地獄かや、哀れはかなき三重有樣なり。疵の口に水入て、女は生年十五歳、時も皐月の菖蒲さく、沼の泡とぞ消にける。夫も死なんと脇指を、尋ね漂ふ朝嵐、里人折あひ、「すは心中」と飛入〳〵、夫婦をとつて引上る。女は死して池水も、みな紅に名を留む。男は生て生甲斐の、甲斐もあるかや蜆川、跡白波とぞなりにける。